

大学生のインターンシップ受入を起点とした 農業経営者間の情報共有や新たな協力・連携関係の構築に向けた 相互学習機会の創出

研究組織：宇都宮大学農学部農業経済学科・栃木県農業士会

所属・職・氏名：宇都宮大学農学部農業経済学科 守友 裕一・秋山 満

栃木県農業士会 事務局長 古森 孝雄

I. 本事業の目的・意義について

(1) 「農業経営インターンシップ」について

農業経済学科では授業の一環として平成19年から「農業経営インターンシップ」を開講している。本授業は栃木県農業士会の協力を仰ぎながら、県内の先進的な農業経営者の生産現場へ学生が10日間通い実施するインターンシップであり、これまで総計53名が受講してきた（初年度7名、2年目11名、3年目9名、4年目10名、5年目8名、本年度6年目8名）。学生に対しては、各回の実習日誌の記録と、全日程完了後の最終報告書の提出を義務付けており、最終報告書として全員分を取りまとめ、受入農家との交流会で配布してきた。学生が提出した報告書からは、現場での経験を通じて学生が大いに刺激を受け、農業への関心・意欲を強め、また人間的にも大きく成長したことがうかがえる。また受入農家からもおおむね好意的な、高い評価を得てきた。

具体的な進め方としては、学生の募集と希望・条件については宇都宮大学農業経済学科が取りまとめ、それを受けて、栃木県農業士会が中心になって各年度の受入農家を選定するという流れを取ってきた。そして学生と受入農家の組み合わせが決定した後は、プレ的に農業経済学科教官1名と実習学生が受け入れ先農家を直接訪問し、十日間の具体的な計画を準備する段取りとなっている。その後は学生と受入農家の当事者同士が一对一の濃密な関係の中で協議しながら進めてきた。このように様々な主体が、多様な場面で柔軟に関わり合いながら「農業経営インターンシップ」が継続してきたのである。

(2) 情報交換会の開催について

「農業経営インターンシップ」実施に関わり、関係する主体が一堂に集まり、直接的に顔を合わせて交流・意見交換する場が求められていた。ここでは、次年度希望学生も含めて情報や経験の共有を図ると共に、受入側の農業経営者にとっても大きなメリットがあると考えた。農業を取り巻く環境が一層厳しくなっている中で、これからの農業経営者は自らの経営だけでなく、地域内での他経営との協力・連携関係を構築するとともに、大学等の研究機関と直接的に交流することが極めて重要な時代となってきたからである。しかし、日常的な付き合いの中では、他経営の内部に関わる情報を得ること自体、なかなか困難である。インターンシップを完了した大学生の報告会に参加することを通じて、農業経営者は自らの経営を見直すとともに、普段は把握困難な他経営の情報を得ることが可能になると考えた。特に、学生の派遣先は、地域や経営品目が多岐に渡ることから、情報共有のきっかけとして適していた（表1参照）。

さらに当事者（学生と受入農家）同士だけでなく、大学教員、農業団体等関係者や、実習未体験の次年度予定学生という異なる立場の関係者も参加する場で、意見交換することは新たな学習の機会を創出することにもつながる。このような情報共有と相互学習が相乗効果を発揮すればイノベーションが誘発され、今後の地域農業の発展へとつながる可能性も決して小さくない。本事業ではこのような好循環の導入口となることを目的として、農業経営インターンシップの情報交換会を開催することを定期化してきた。

表1 平成24年度インターンシップの派遣先

地域	経営品目
宇都宮市	花卉(切り花)・トマト
真岡市	花卉(鉢物)
さくら市	温泉なす、水稲
鹿沼市	梨・リンゴ・直売所
宇都宮市	イチゴ、水稲
宇都宮市	ユリ、水稲
宇都宮市	イチゴ・水稲
宇都宮市	トマト



写真1 宇都宮市の受入農家と実習学生

II. 研究方法について

具体的には以下のようなスケジュールで、授業の一環である「農業経営インターンシップ」と連動しながら、情報交換会を企画・運営した(表2)。

表2 今年度事業のスケジュール

4～2月	農業経営インターンシップの実施
8月中旬	農業経営インターンシップ事務打合せ ・平成24年度実施状況確認 ・平成25年度希望学生受入調整
2月上旬	学生による報告書提出・報告集の作成
2月下旬	農業経営インターンシップ情報交換会 ・学習講演会(津谷好人教授) ・平成24年度・最終報告会 ・平成25年度・対面式 ・学生・農家・教職員交流会

III. 事業の進展状況(2月情報交換会)について

2月20日に、24年の最終報告会と25年度の対面式を兼ねて、インターンシップ情報交換会を宇都宮大学にて開催した。なお、本年度からは、大学

サイドからの情報提供も意図し、情報交換会の一環として、農業経済学科スタッフによる学習講演会(津谷好人教授)を開催することとした(表3)。開催の事前に、受入農家に対しては郵送で、学生(24年度修了者、25年度予定者)、本学科教員に対しては掲示にて告知し、当日は42名の参加者が集まった(表4)。なお、学生から提出された報告書を基に2月上旬に作成していた「最終報告書」を、参加者に配布した。

また、講演者の津谷教授には、その準備をお願いし、講演用資料も作成、参加者全員に配布した。講演聴衆者も含めると、参加者は50名を超えて盛況な会となった。

表3 13年2月20日(水)のスケジュール

宇大・栃木農業士会の情報交換会 式次第

〔開催日時：13年2月20日(水)
開催場所：UUプラザ2階・
コミュニティープラザ〕

- 講演 宇都宮大学教授 津谷好人
「学習講演会 農業経営トップリーダー
に期待すること」
(13:30～15:00)
- 農業経営インターンシップ情報交換会
(15:00～17:00)

1. 開会
2. あいさつ
3. 情報交換会
 - (1) 平成24年度について
修了生(8名)の発表
受入農家からのコメント
 - (2) 平成25年度について
実習先の発表
実習予定者と受入農家の対面式
 - (3) 総合討論
「農業経営インターンシップ」
全体に関して
4. あいさつ・コメント
5. 閉会

○懇談会(17:30～)

場 所：大学会館2階・談話室

表4 2月20日の参加者

栃木県農業士会	
受入農家（24・25年度）	13名
関係団体	3名
宇都宮大学農業経済学科・参加学生	
2・3年生（24年度・修了者）	8名
1・2年生（25年度・予定者）	8名
農業経済学科・教員	10名
総 計	42名

今年度初めての企画として、情報交換会の一環として、学習講演会を行った。テーマは、「農業経営トップリーダーに期待すること」と題して、農業経営学講座の津谷好人教授にお願いした。農業士会の経営に直接関連する分野と言うことで、農業士会、及び関連団体からも関心が高く、活発な質疑が行われた。学生からも、授業と異なる現場向けの実践的な話が好評であった。



写真2 学習講演会の様子

次に、24年度・修了者が、各経営の農作業や経営戦略の特徴や改善点を整理し発表した。当日は最終報告書とは別に、パワーポイントの資料を作成し、1人10分程度の発表を行った。当日、就職活動と重なり欠席した者も1名いたが、その場合は報告書とは別にお礼の手紙を寄せてもらった。各修了者の報告後に、受入農家からのコメントをもらい、その後、他の参加者も含めた質疑応答を行った。

さらにその後、平成25年度の実習先の予定を発表し、そのまま学生と受入農家の対面式を行った。前年度の報告会を聞いた直後ということもあり、ほとんどが初顔合わせであるにも関わらず、スムー

ズかつ和やかな交流・意見交換が実施できた。

最後に全体を通じて、「農業経営インターンシップ」の今後の進め方や、その他の方面への活用方法などに関する意見交換を行い、閉会した。その後、場所を変更し、懇談会も行った。

懇談会においても、学生と受入農家の交流が深まると共に、教官層とも今後の会の持ち方に関して活発な意見交換が行われた。



写真3 参加学生のインターンシップ報告の様子



写真4 受入農家からのコメントの様子



写真5：平成24年度修了生発表と討議の状況

IV. 事業の成果について

「農業経営インターンシップ」本体は6年前から実施してきたことではあるが、情報交換会開催

の定期化と農家・学生・教官が一同に学習する学習講演会の開催は今年度の本事業からの取り組みである。こうした取り組みの効果は、即座に目に見えるわけではないが、この会をきっかけに、関係者の「農業経営インターンシップ」に関わる意識や、関係者同士の相互関係に少しずつ変化が生じ始めている。

まずは、学生と農業経営者との関係にも変化が見られた。昨年から実施している情報交換会により、実習終了後から若干の期間を空けて再会し、学生は発表を、受入農家はコメントをすることになった。これを契機に、実習体験を振り返り見直す機会が貴重な体験となっている。また、他の人の発表も併せて聞くことを通じ、自分達が直接は関わらなかった他のインターンシップの経験を知ること、自らの経験を相対化し位置づけ直す契機となっている。

そしてこの場に後輩や教員が同席することは、ほど良い緊張感を生み出している。実習生は修了後の発表を意識することで、実習本番に臨む意識が高まる。そしてさらにより良い最終発表ができれば聴衆の反応も良くなり、本人にとっても自信がつく。

次年度参加予定学生にとっては、報告会を聞き、実習が始まる前に修了生に質問をすることで、実習前の疑問点や不安を解消することができる。また実習に臨む前の素朴な疑問・意見は、農業経営者にとっても新鮮な視点を提供することになる。

教員にとっても、普段大学で目にする事のない学生の新たな一面を見出すことにつながるとともに、地元でがんばっている農業経営者の経営戦略や考え方を深く知るきっかけになる。

また農業経営者には、今年度から農業経営学科スタッフによる学習講演会を企画したが、「農業経営トップリダーに期待すること」と直接経営に結びつく題目であったこともあり、参加者の多くの関心と呼んだ。また、情報交換会での学生や教員の発言を聞くことを通じ、教員の研究内容等を知る契機となっており、「大学ももっと農業士

会を活用してほしい」、「今後、もっといろいろな意見交換の機会を作ってほしい」のコメントも得られている。

このように情報交換会が関係者それぞれに様々な好影響を与えていることが確認できるが、最後に、大学と農業者との距離を縮めるきっかけになりつつあることも付記しておきたい。農業者の中にはこれまで宇都宮大学に来る機会がなく、初めて訪問した人も数名存在した。近くにあることは知っているが、行ったことのない「何となく遠い、敷居の高い」存在であったわけであるが、これを機会に身近な存在となったという意見も寄せられている。

以上の経験を踏まえれば、今後は農業経済学科だけでなく、農学部全体、大学全体へも段階的に連携の輪を広げていくことができれば、より高い効果を引き出すことが期待できる。

最後に、農作業等で多忙にもかかわらず、実習と情報交換会の開催を快く引き受けてくれた、栃木県農業士会と受入農家の皆様に感謝の意を深く表したい。



写真 6：平成25年度予定者の対面式の様子

栃木県農業士会と宇都宮大農学部 インターンで懇談

【とちぎ】栃木県農業士会（事務局）と宇都宮大農学部が連携して取り組む「農業経営インターンシップ」交流会が20日、宇都宮市の同大学で開かれた。今年度参加の学生や教授、受け入れ農家など関係者約40人が出席。体験で得られた貴重な「現場力」を通じ、将来に備えたいとした。

同制度は、座学が多くなりがちな農学部の学生に、先進的農家で10日間実体験してもらい、現場での技術や経営技術に関する知識を肌で感じてもらおう試み。同農業士会が支援して7年目。今年度は花き、施設園芸、水稲、果樹などで8人を受け入れてきた。

学生たちは「農業ほど可能性を含む仕事はないと思った」「イチゴ栽培に取り組みたい」「収穫の達成感を味わえた」「グローバルな視点に立



現場で学んだ内容を報告する実習生（20日、宇都宮市で）

「いい芳賀いちご夢街道道協議会」はこのほど、まつり」と「おとちゃんいちごSLSスペシャルイベント」を開いた。

スペシャルイベントでは、真岡市の御真岡鐵道が運行するSLSの乗客全員に、JAはが野産の「とちおとめ」をプレゼント。乗客はイチゴの飾り付けがされた車内で旬のイチゴを堪能した。

夢街道まつりでは、芳賀郡の1市4町（真岡市、益子町、茂木町、市貝町、芳賀町）の同街道に加盟する31の施設や店舗が、それぞれオリジナルイベントを行った。

JAはが野井頭フレッシュ直売所では、綿あめ無料配布をして、大盛況だった。

「経営が求められていることを実感」「手間が利益につながる」「向上心を持つ大切さを教わった」などと感想。受け入れ側は「農業の前に、一人の社会人として成功した」と紹介した。

交流会に先駆け、同大農学部の津谷好人教授が「農業経営トップリーダーに期待すること」と題して講演。ドイツ農業のマイスター制度や歴史とともに、農業支援システムなどについて事例を挙げて紹介した。

参考 学生が報告会に使用したパワーポイント資料

実習内容

- 配布と定植
- 枝の誘引
- ホルモン処理
- 花びらとり
- 収穫、箱詰め
- マルチ張り
- ナスの葉かき




なす農家へ実習参加した女子学生

作業に夢中した僕です 水はけのため、溝づくり作業




イチゴ農家へ実習参加した中国からの留学生